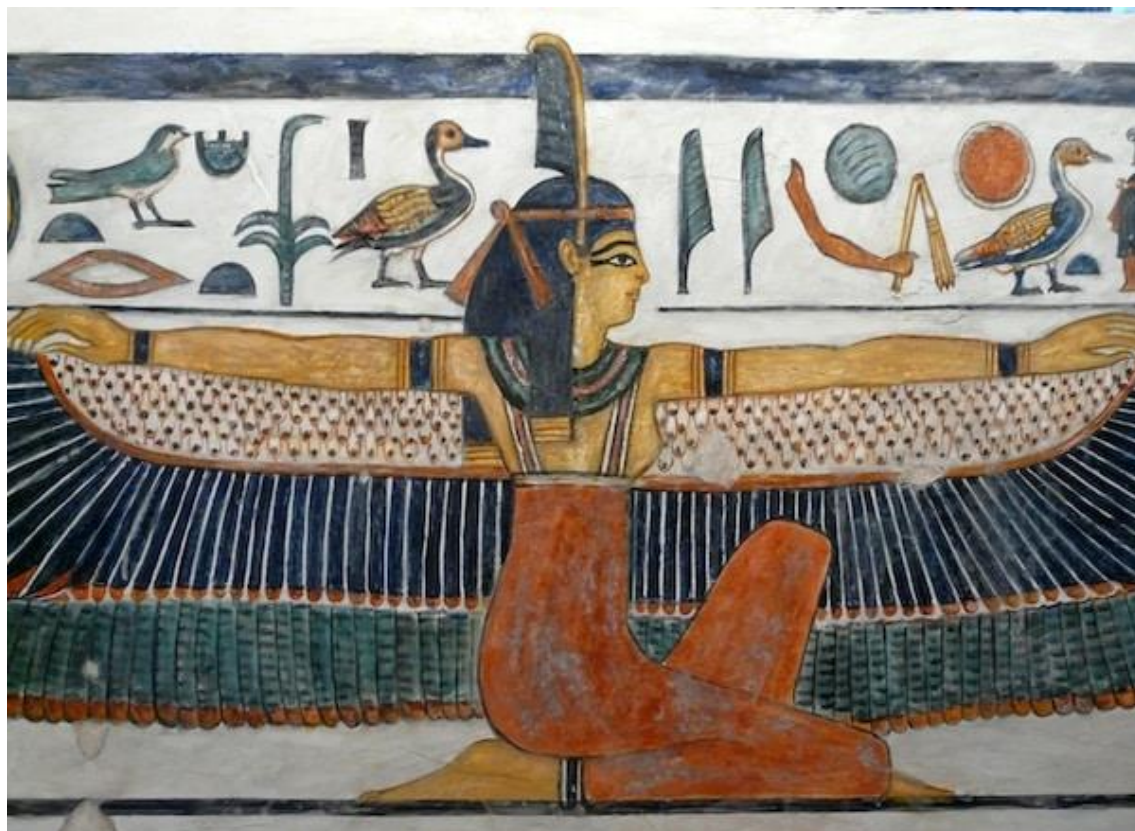


アフロセントリズムの批判的考察

シュジャー・アル＝ラシッド著、脇浜義明訳、田中一弘補訳

原典：Hood Communist, 2023年4月22日、脚注はすべて訳注



文化とは闘いを意味し、それは私たちの戦いである。セク・トゥーレ（ギニア共和国初代大統領）

マーカス・ガーベイ¹のブラック・ナショナリズム運動であるガーベイ主義とアフロセントリズムは必ずしも同じものではないが、民族意識の呼びかけという点で共通している。どちらも、エイサ G. ビリアード三世が言った「自己起源の認識及びそれへの帰還の必要」を信奉者に呼びかけている。この言葉は、世界中で難民生活を強いられている黒人が「少なくとも虐待への闘争の共有という点で統一される民族だ」という認識を表現してい

¹ 「マーカス・ガーベイ（Marcus Mosiah Garvey, 1887年8月17日 - 1940年6月10日）は、黒人民族主義の指導者、ジャーナリスト、企業家。世界黒人開発協会アフリカ会連合(UNIA-ACL)の創設者。ジャマイカの国民的英雄であり、20 ジャマイカドル硬貨の肖像になっている。」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%82%AB%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%82%AC%E3%83%BC%E3%83%99%E3%82%A4>

る。この考えを持つ人々は、解放闘争の他に、今では奴隷制のためにほとんど忘却されている一般的な「アフリカ的世界観」と文化的論理の共有を主張している。我々黒人のこの記憶ギャップは、故郷アフリカから暴力的に引き離され、ヨーロッパの退廃的で宿命論的な価値観と行動に嵌め込まれたことから生じた。この「文化的記憶喪失」から抜け出すためには全面的方向転換、場合によってはヨーロッパが人類の歴史と思想形成に貢献したという従来の考え方を全面的に破壊しなければならない。実践的には、この二つの運動は往々にして次の三つの形を取る。1. 「伝統的アフリカの価値観」を明確にして、それをヨーロッパ中心主義思想と対峙させる。2. その価値観を基盤として、白人中心主義の支配を粉砕するのに必要な政治・経済的枠組みを創出する。3. 1と2を完成させたら、その文化的公理を世界中のディアスポラ黒人（教育水準がばらばらなのでそれぞれの水準に合わせて）に知らせ、それに基づく結束と統一を呼びかける。

ここでいう「伝統的アフリカの価値観」から導き出す「政治的・経済的枠組み」はどういうものになるだろう。社会民主主義になるのだろうか、それとも「集団資本主義」型の枠組み²になるのであろうか。後者においては、循環するのは我々の金銭であり、我々は「我々の力を増強し」「他者から我々の存在を認めさせる」努力をすることになる³。一つはっきりしているのは、社会主義は「白人」の考え出したものだから、その選択肢はないということだ。皮肉なことに、資本主義を産み出してアフリカや世界に波及させた国は何処だとアフロセントリストに質問すると、彼らは返答を拒否するか、「アフリカ社会主義は失敗した」ことを指摘する。そして、米国の保守系黒人知識人トーマス・ソウエルとか、大統領になったオバマの兄でケニアと米国の国籍を持つブルジョアジーのマリック・オバマを引き合いに出す。重要な点は、アフロセントリストやネオ・ガーベイ主義者はブルジョア社会の退廃を批判する点では正しいが、文化主義の枠を乗り越えることができないので、アフリカ人を搾取する現システムを打破する方向へ向かわないのだ。

アフロセントリズムの観念論的誤り

弁証法的唯物論は文化の重要性を評価しなければならないことを説明する前に、まずアフロセントリズムの哲学的基盤をもう少し検討しよう。それは文化的タイプの観念論と表現することができる。観念論とは、世界は基本的に精神（個々人の精神あるいは神のような究極的な精神）によって決定され形成されるという考え方である。観念論者は考え方や心の持ち方で世の中が変わるとし、抑圧も自分の感じ方の問題にすぎないとする。では、アフロセントリズムのどこが観念論なのだろうか。クリストファー・J. ウィリアムズはノ

² 終身雇用や経営者が従業員を家族のメンバーのように支配する昔の日本的資本主義がその一例になるのだろうか。

³ 生産手段の私的所有が維持され、人民はそれから疎外される。

ーマン・ハリスを引用してアフロセントリズムの反唯物論的性格を説明した。

アフロセントリズム姿勢は、反物質主義的でないとしても、意識が存在を決定すると主張する姿勢である。その意味で、意識とは個人（または集団）が、自己、他者、自然、何か優れた思想とか存在との関係を考える様態を意味する・・・例えば、古代エジプト人の「人は己自身を知れ」という主張は、その人が種々の物質的条件に支配されそのもとで搾取・剥奪されている状態よりも、その人の世界の見方（世界の概念化）の方が先行してその人の生活と人生を決定する、と説くものである。（「唯物論擁護：アフロセントリズム・オントロジー批判」、2005）

この種の反唯物論思想家は、アフリカ人にはある種の不可知な本質がアプリアリに存在していると考える。アフリカ心理学のナイム・アクバルは次のように書いている。

アフリカ心理学は人間の本質は精神であると主張する。それが意味するのは、人間を最低項に還元すると、見えなくなり宇宙の一部となる。私はかつて（1976年）アフリカ人の人間概念は、基本的には世界内の森羅万象との連続体であることを規定する力だという考えに立脚していることを論じたことがある。（アクバル著『アフリカ心理学アクバル論文集』、80頁）

さらに彼は次のように述べている。

アフリカ心理学は、人間は究極的に宇宙の本質と一体化する存在、一つの宇宙的存在に還元されると見る。人間の価値は相互作用で助け合う自然の構成要素と同じように、潜在的に互換性があると判断される。従って人間は潜在的に調和的で、宇宙自身と同じように無限大であると考えられる。（同、80頁）

ここで注意すべきは、いわゆる精神というものが漠然として捉えようがないことだ。ヘーゲルとかある種のキリスト教徒の著作物を読んだ人なら、アクバルがすべてのものの創造主で我々の行動を指導する包括的なガイスト（精神）または神の存在を予定していると考えられるかもしれない。実際アクバルは、前掲引用文の前段落で唯物論を争いばかりする思想として批判している。しかし、これは唯物論そのものの批判というより、唯物論を白人文化の一つと見て否定しただけのようだ。精神的調和の世界観を持つと同時に絶対的の者（神または精神または宇宙）との観念論的一体性を持つ世界観を肯定する必要があるようだ。

アフロセントリズムは、我々黒人が自分たちの感性と思考を脱ヨーロッパ化させて、アフリカの自己意識またはアフリカ教ともいべきアフリカニティ（コビ・カンボン）を発

展させよと論じる。これが何を意味するかはあまり明瞭ではない。おそらく言いたいのは、前にも述べたように、我々はアフリカ人であり、共通の精神、共通の生活様式を持っていることを自覚せよということだろう。しかし、ヨーロッパ的精神とかアフリカの精神を条件付け、形成するものに関する説明はほとんどない。我々としては、遺伝子内におけるメラニン色素の量で人種化される特質のようなものを想定するしかない。

この思想の問題点は、本質論的説明と非科学的な哲学、そしてヨーロッパ的なものをすべて反射的に拒否する姿勢である。LGBTQの人権擁護運動や性差別反対運動もヨーロッパ起源と見做され、良くない運動とされる。再びウィリアムズを引用する。

アフロセントリズムが文化の物質的基盤を認めないために、奇妙な政治的結果が生じている。ネオコンはアフリカ系米国人が直面する問題は基本的に彼ら自身の内部問題だと主張しているが、それを支えることになるのだ。このため、アフロセントリズムをラジカル・リベラル対保守・極右の争いという政治的スペクトルの中で位置付けることが困難になる。アフロセントリストは黒人差別する現支配体制と闘うと宣言しているにもかかわらず、絶えず文化を社会構造から切り離して、アフリカ系米国人の現在の文化傾向が進歩の妨げになっていると非難する。この自己衰弱的非難はネオコンの偏見と一致することが多く、現に右翼の大物はアフロセントリスト学者が展開する議論にうなずいて肯定を示す場面が多い。

きっと『ニューアフリカン』読者たちもこういうことを経験しただろう：警官暴力、病院での差別、政治的弾圧などに対して、我々黒人文化に問題があり、警官などから「敬意」を集めないからだという説明をされたことがあるだろう。LGBTQへの嫌がらせ、暴力、殺害に対しても、それは黒人問題ではなくて、同性愛黒人は「病的に異常」で、当然の報いを受けたにすぎないという説明を読んだことがあるだろう。またある時には、資本主義には何ら悪い点はなく、それが問題なのは白人がやっているからだという説明を読んだことがあるだろう。要するに、資本主義社会の諸問題や全方向的な黒人差別・抑圧を、それと正面切って闘うよりは、考え方で誤魔化してしまう文化的民族主義形態があるのだ。

文化と弁証法的唯物論

弁証法的唯物論は文化の問題を、アフロセントリズムの罠に陥らないように、どのように扱うべきか。アミカル・カブラルとセク・トゥーレの作品がヒントを与えてくれる。まず唯物論者は文化をどのように捉えているかについて、トゥーレが『文化に対する弁証法的アプローチ』と題する演説の中で行った定義を使うことができる。彼は次のように言った。

我々が文化として理解するものはすべての物質的・非物質的な芸術や科学の産物で、それに加えて知識、風俗、教育、思考様式、自然の支配的影響力から解放されようと人々が闘う過程で培ってきた技術や生活様式も含まれる。さらに、偏向的政治や社会生活の生産的過程を通して人々を支配・搾取する社会システムとの闘争の成果も含めるべきだろう。それ故文化とは人間だけの創造物であると同時にその創造の源泉として、あるいは社会・経済的解放闘争の手段として、あるいは人民支配の道具として、その姿を明らかにすることができる。こういう定義は文化が人間と人間を取り巻く自然的・社会的環境の間の関係に依存していることを強調している。文化は単に人間の頭の中から生まれたのではない。実際、我々が文化に接し理解するのは、土器、道具、言語コード（シュメール文字）など物質的産物を通してである。我々は「鉄器文化時代」と「青銅器文化時代」などと歴史を区画したり、「封建主義、重商主義、資本主義」と文化を概念化して区分する。つまり、文化進化の主要要因が政治的・経済的編成であり、生産関係であることがそこに現れている。

カブラルは「民族解放と文化」と題する講演の中で次のように言った。

外国支配の抵抗要素としての文化の価値は、文化が外国に支配されている又は支配される可能性のある社会の物質的・歴史的現実を、イデオロギー的あるいは思想的に、明確に表現するという事実の中に存する。文化は、人間と環境の間の関係の進化、あるいは一つの社会内の人々や集団の関係、あるいは社会と社会の間の関係に良い影響と悪い影響を及ぼす。それは人間の歴史の成果であり、同時に歴史を決定づける要素でもあるのだ。

ここでも、文化が社会の物質的現実のイデオロギー的「表現」であることが力説されていることに注目すべきである。弁証法的唯物論者は文化の重要な役割を無視しない。彼らは文化変革の呼びかけは生産システムの変革の必要性をイデオロギー的に表現するものであることを指摘している。アフリカ人の消費主義文化の非難やブラック・オン・ブラック暴力⁴非難の声を聞いたなら、立ち止ってそういうものを産み出す構造的要因を考えるべきである。

物理的現実に関する「イデオロギー的反映」という概念を正確にはどのように理解すべきであろうか。マルクスの単純および拡大再生産という概念（生産過程が循環的に再生産されること）と同じように、社会的再生産と名付けられる過程もある。マルクスは、一般

⁴ : トランプ等極右勢力が、警察の黒人への暴力を隠すために、暴力殺害された黒人の97%は同じ黒人の暴力によるものというデマ統計を流して、黒人の狂暴性を強調する。これをブラック・オン・ブラック暴力と呼ぶ。

生産過程において生産力が再生産されるだけでなく、資本主義的生産に必要な生産関係も再生産されることを、『資本論』の中で説明している。上部構造の文化との関係で言うと、日々の生活、とりわけ児童の発育段階で、「文化の論理」と呼ばれるものが人々に押し付けられて内在化される。この「論理」が、いろいろな形で、人々を同じ方向へ向かわせる道である。

子どもは社会化の過程で母親等自分の外の知識を得るだけでなく、文化も取り込む。ソ連時代の思想家の絵ヴァルド・イリエニコフは「生まれた子どもは外の世界だけでなく、非常に複雑な文化システムと直面する。このシステムは子どもに「行動様式」を教え込む。この行動様式は遺伝子的に（先天的に）子どもの体内にコードとしてあったものではない」と書いた。さらに、彼は次のように書いている

自分の肉体の有機的（自然的）要請に基づく行動ではなく、自分の外からの要請に応じて動こうとするときに、意識と意志が必要な心的活動形態をとる。そのとき、自分が生まれ育った社会が容認する「ルール」に従うことになる。人が有機体としての自分と異なる行動をせざるを得ないのはそういう条件下にいてのみである。「ルール」は先天的・遺伝子的に受け継ぐものでなく、外から学習して内在化したもの、つまり自然でなく文化によって身に着けるのである。

米国思想家ジョージ・ハーバード・ミードも同じようなことを書いている。彼は自著『精神、自我、社会』の中で「一般化された他者」(generalized other)という概念を展開している。彼は、次のようにのべている。

人に自我という統一体を与える組織された社会やグループを「一般化された他者」と呼ぶ。一般化された他者の態度は、コミュニティ全体の態度である。例えば、野球チームのような社会集団の場合では、チームが一人一人の構成員の経験に入る（組織化プロセスとして、あるいは社会活動として）範囲において、チームは「一般化された他者」となる。

それ故、人は予め用意された文化的マトリックスの中に入り込み、文化化されるのだ。その文化は時の生産様式と社会関係にとって最もふさわしい文化となることを忘れてはいけない。例えば、封建時代ならば、牧師、領主、農奴の生活経験を反映したものが常識として通用し、人を支配する。当時の知識人は「存在の大連鎖」(great chain of being)と呼ばれた構想を作り出した。その状列の最下層が農奴で、辛うじて動物の上に位置し、最上層は教会で、神のすぐ下に位置する。この階層秩序を疑問視する者は厳しく処罰され、社会的除け者にされる。資本主義時代になっても、同じような階層秩序が生まれて、施行される。

資本主義支配に対する闘争の中での法律の役割に関して付言したい。マルクス主義法学者のエフゲン B. パシュカーニスは「レーニンと法の問題」と題する論文の中で驚くべきことを書いている。「専制主義と資本主義のもとでは、それに対する革命的な闘争を伴わないで、大衆の法的無能、大衆の法的知識貧困に取り組むのは不可能である。大衆の法的無能は帝政ロシアとその後のブルジョワジーが大衆の一般的服従の姿として望み維持しているのだ。だから、プロレタリアートの権力奪取を先行させ、権力奪取後にそれを優先的文化教育として、社会主義建設の前提条件として、取り組まなければならない」と書いている。だから、イデオロギー面だけで大衆教育をやる風潮には警戒しなければならない。まず、資本主義的階層秩序を破壊し、大衆の社会的地位を高める闘争をしなければならない。つまり、生産手段を人民支配下に置き、国家の抑圧装置を人民管理下に置くことが必要だ。そういう構造的変革の勝利のうえで文化闘争に移行、または同時並行的にやるべきである。

何を為すべきか

アフロセントリストの「アフリカ化」と言う文化思想は物質的に裏打ちされるときに実現できる。つまり、人々の潜在的意志が集団的意志として結実できる条件の整備が必要だ。だから我々がアフロセントリズムに対する姿勢は、「そう、君らの言う通りだ。で、どうするのだ？」である。考え方の変化だけでなく、考え方の基礎になる物質的条件の変革が必要であることを、アフロセントリストたちに理解させなければならない。

「闘争の中で、闘争を通じて、我らの先達の努力を称える価値観に立脚した新社会を創造しなければならない」。 (トゥーレ、『文化への弁証法的アプローチ』、1971)